

複合形態による福祉関連施設の地域特性

地域と共生する高齢者福祉施設に関する研究 その1

The Locality of the Welfare Related Agency of Architectural Complex

A Study on the Symbiosis of Welfare Institutions for the Aged and their Location part 1

樋口 眞基子*

Makiko Higuchi

I. はじめに

いま、建築計画研究の分野では、その基盤ともいえる計画・設計の「実践」との関わりに焦点を絞り、計画研究の方法を探求することに関心がよせられている。なぜならば、多くの建築計画研究が建築のヴィジョンや実践との結びつきを欠いたまま、経験的・慣習的な方法で、人間と空間を関係づけていくことに終始しているにすぎないのではないかという反省を含めて、そういう中で社会的にも次第に活力を失っていくのではないかという危機感が漂っているからである。

確かに産業・経済・政治等の機構の構造転換、情報社会、超高齢化社会の到来など社会は劇的な変革期に突入し、建築に求められる役割は自ずと多様化・複雑化し、建築計画研究も大きな転換を迫られている。

そこで、建築計画研究で論じられている点を考慮に入れて今回は、高齢者の居住環境としての高齢者福祉施設を計画する際に、最も理解しなければならない自然・人間・社会・政治・経済・文化等のコンテクストを明らかにすることと、それによって今後の福祉施設の形態について、平面計画面の居住性を越えたところで課題が明らかになればと考える。

II. 目的と方法

高齢者福祉施設をいかに評価するか、その新たな評価軸を求めて最近建設された合蓄の形態をとる複合施設を三例取り上げ、その意義を検討するものである。

その方法は施設長、関係者のインタビューと施設見学をすることによってここでいう評価、利用者、あるいは当轄者・施設長・関係者がどれだけ興味をもって、この建物の機能と対話をなしてきているかどうか、それがどのように反映されて、現時点で環境としての建築がその社会性をいかに実現しているかを考察する。

なおこの研究は共同研究「関係性としての共生」(本誌47頁)の研究方法与調査対象による。

III. 考察

(1) 焦点をどこにあてるか——配置計画と地域性へ

高齢者対応の施設は、設計段階ではいいなど思っていたところでも数年(5~10年)経つと別の対応がよぎなく迫られる。特に設備面の中でも水周りは変更しないとうまく使えず、職員の労働負担にかかわってくるわけで人的手段で当面は荷なっているが、その後、それを機械か

*住居学科

人か、あるいは環境を直すのかどうしたら次の場面に負担なく対応できる環境作りができるかは関心のあるところだが、機能的耐用年数に応じた対応が必ず出てくることはまちがいない。

又、経年変化で起こる老化の自立行動の変化はだんだん介助が必要になるということで、車椅子使用者が圧倒的に増える点にある。将来の高齢者は、施設に入る年齢も高くなり、身体機能も今より低下が著しい状態で入所するようになるだろうから、施設を利用する平均滞在時間が短くなる。できる限り自分で生活したいと思い実現するような住環境に変わってくるようになるのではないか。つまり、自立した生活が長くなる。それによって施設の使われ方も、現在の経験的、慣習的な老人ホームの思想で計画されるならば、それは利用者にとって不愉快な終末を送る終の住処としては非常にさみしい場所になってしまいかねない。

そのような時代の流れの中で、施設はより重度化した対象者の施設と地域利用施設としての存在の意義がますます求められるようになってくると云われる。今回の事例で取り上げる三つの複合施設は、平面・計画や設備計画においては十分に検討されたバリアフリーの完結な形と、最新の技術とで整備された施設であるから、後者の側面について、諸施設の先駆的なケースとして評価できるものとして取り上げた。

したがって、合蓄の形態をとって建設された複合施設の地域性に、どのような特性があるかを考察するものである。

(2) 地域における高齢者福祉施設のあり方

1) 地域における福祉関連施設に期待されるもの

ますますの長寿化に伴って、高齢者が置かれた状況は、老化という未経験の事象が予測しがたい様々な生活構造の変化や心身上の諸問題を引き起こすことになる。これらの事象や変化を肉体的・精神的に受け入れていかなければなら

ないことはいうまでもないが現実に日常生活を営む上で諸問題を克服していくことが必要となる。それらの問題を克服するために個人がどれくらい、どのように努力するかは自由であるが、克服方法や問題の所在を情報としていかに社会が個人に提供できるかが極めて重要であると考えられる。また、その時期は高齢期になってからでは対応することが非常に難しくなる場合もあり、向高齢期や壮青年期・児童期からの対応が望ましい。こうした自助努力を最も効果的に発揮できるように支援・援助することが地域における福祉関連施設の利用に期待されている。

現在、全国の自治体に建設された地域利用の福祉関連施設は合蓄形態で進められ、各種の施設が総合化・複合化していく傾向が著しい。高齢社会を見据えて、高齢者に関する施策決定の内容を示すゴールドプランによれば、社会福祉の展開を図るために、「ノーマライゼーション理念の浸透・福祉サービスの一般化・施策の総合化体系化・利用者の選択幅の拡大」を基本的な考えとして施策展開の方向として在宅福祉の充実、福祉と保健・医療の連携・総合化、福祉を担う人的資源の養成確保、サービスの総合化・効率化、自治体の役割重視、民間福祉サービスの健全育成をかかげている。このような方向性を推進する上で、地域において利用される福祉施設サービスとして、存在の意義があり、重要な役割を担うものとして積極的活用が望まれるところとなる。そこでは、利用対象者を高齢者と限らず、誰でも、福祉関連施設を利用するという対象として捉えて、地域社会の福祉資源や福祉意識の状況、利用者ニーズを考慮した施設体系・施設種類を明らかにしたうえで、どのような機能を持つ施設が求められているのかという視点で建設されるに至っている。地域において高齢者福祉施設を計画する際の基本的課題として①地域との関わりを既存施設・人的福祉資源・地域の福祉意識等の面、②地域に必要な高齢者に対する支援内容、③地域における施設としての利用価値・役割と持つべき機能の面、以上の3側面の見当が挙げられる。

2) 地域における福祉施設複合化

石田氏の1991年調査によれば全国の10万人以上の227自治体のうち35%以上が、2種類以上の公的福祉関連施設としての地域利用施設との複合であり、建設・計画と検討中も40%に及んでいる。又、その複合化の内容は経年的に変化し、施設の組み合わせ種類・規模に変化がみられ、複合する施設種類の数も3～5と多くなっている。施設種類は老人福祉施設センターが多いが、最近では高齢者サービスセンターが急増しているという報告がある*1。

このように複合化が増加しているのは、用地難や土地の有効利用・施設や職員の連携・管理運営への対応などによる単なる施設の併設・合蓄だけでなく、サービスの総合化・健全者と障害者の交流・複数施策需要への対応・対象の広範囲化など地域における福祉推進のための様々なサービスを提供するといった、施設・設備や人的資源の供給の場と位置づけられ、在宅福祉の推進に寄与するところが多いためであると考えられている。

又、最近では施設の大規模化が進み15,000㎡に及ぶものがある一方、小規模2,500㎡～3,000㎡の程度のものも多く見られ、複合化が必ずしも施設規模を大きくすることだけによって構成されとはいえないことが明らかになっている。また、大規模施設の利用者間の接触や共用利用のための諸施設・室機能ではプール・体育施設や多目的ホールなどを設けるところが多く見られる一方で、小規模施設にあっては会議室・ロビーやホールなどを利用して高齢者・障害者を含めた市民全体の交流を図ることが可能なように計画されてきている。ノーマライゼーションの具現化のために積極的なコミュニケーション機能としての市民交流の場が設けられることが望ましいが、これらの場や室が単なる貸し室の提供にとどまらないようになる為には、実施事業に至るまでの施設計画と管理運営計画に責任が求められる。

3) 地域における福祉関連施設の中核——老人サービスセンターの現状

地域における福祉関連施設が複合化する場合、組み合わせの対象として老人サービスセンターのしめる割合は極めて高く、この施設を抜きには計画できないまでになっている。老人サービスは国の取り組みとしては、昭和54年に制度化され、昭和60年に96ヶ所昭和61年210ヶ所、平成5年には430ヶ所と急速に整備されてきた。施設内容についても、昭和61年には同事業に対する国庫補助率が1/3から1/2に引き上げられた。平成元年の高齢者保健福祉10ヶ年戦略では運営の多様化として、小地域単位での整備、従来の特養・養護老人ホームや老人福祉センターとの併設の他に老人憩いの家・老人休養ホームへの合蓄や他の施設との併設、単独設置が認められるようになった背景がある。平成2年には計画的に10ヶ年で10,000ヶ所（将来中学校に一ヶ所）の整備目標が立てられた。平成3年には身体障害者サービス事業との相互利用が認められる。さらに平成4年には小規模型、痴呆性老人向け毎日通所型、保育所合蓄・空き教室の利用が認められるようになってきた。この短期間に、各地域市町村の実情に合わせた政策が次々に展開されてきている。

4) 地域における福祉関連施設と在宅福祉サービスとの関わり方

福祉関連施設の在宅福祉サービスは単純にサービスの提供にとどまるのではなく地域における福祉コミュニティの活性化を強める機能としての用きが意識され、施設の計画には地域の特性が多分に盛りこまれて来ることが、施設が利用される可能性を大きくすることになると考える。

もちろん今の段階では在宅福祉サービスの充実がサービスを提供する側と受ける側の双方の緊急の課題として、サービスを受ける側にとって、現行の公的措置による利用者決定が、活動を受け身とさせているのではないかという指摘もあるように、要援護から虚弱高齢者まで幅広い層に自立した生活への支援を目的とする場合、

本人や家族のニーズに応じたサービスの選択・決定が内的に充実していくことが課題であり、能動的活動が行えるような体制整備が必要である。それには、経済的負担を極力減じた上での応能負担利用を新たに採用し、幅広いサービスの供給を行い利用者層の拡大を図ることがまず云われているところである。こうした実践活動が地域コミュニティの充実や福祉意識の向上へとつながると考えられている。又、地域における老人ディサービスセンターを含めた福祉施設の複合化は在宅福祉の充実に重要な役割を担って行くものと期待されるならば施設の建設（あり方）が、市民に注目を魅くデザインが検討される中で、市民感覚にあった雰囲気や形態にしてそのことこそが建物としての寿命と健全性を保証するものになるといえる。

（3）高齢者福祉施設と運営の考え方の事例

3施設の概要を表1に示す。

1) 社会福祉法人江東園（江戸川区）

江戸川区の江東園は昭和37年に生活保護法による救貧施設として認可され、昭和51年に同じ敷地内で養護老人ホームと保育園をはじめた。昭和62年には新たに特別養護老人ホームとディサービスセンターも併設した。

地上3階、地下1階の建物で、保育園は1階、お年寄りたちの居室は2、3階で(図1参照)、子供たちは、自由にお年寄りたちの部屋に行くことができる。子供からお年寄りまでが交流の場として活用している玄関ホールは、全利用者が一堂に会せるだけの十分なスペースが設けられ、食堂もお年寄りと子供たちが一緒に食事を囲む昼食会が行われる場所として、また、ゆっくりくつろげる場所として好評だという。

毎日、園から元気な笑い声が聞こえてくると同時に、子供たちとの交流によって、お年寄りの顔に自然に笑みが浮かび、子供たちもお年寄りと接するしぐさに、言葉使いに変化があらわれている。同一敷地内にあった頃は、老人施設を横に見ながら子供たちは老人を「こじき」と呼んだ。それが、今や、老人たちの暮らしが見



写真1-1



写真1-3



写真1-2



写真1-4

違えるほど明るくなり、建物がきれいになったという以上に、子供が老人の相手になるという役割が老人の精神的な居場所をつくることになったと誰もが認める。

民間である江東園の運営の基本的考え方は、設立以来に恒る職員の不断の研究と実践でますます確固たる地盤を築いたといえる。そのソフトとしての老人や幼児に対する正しい理解が合蓄という建物の形態を通して生活空間を共用することによって、生きる意味の実を結び、園の目標である社会福祉の理想とする3世代交流が現実となっている。つまり、ここには人と人との共生が「生きがい」を見出す空間として華やいている。

とはいえ、江東園の立地している江戸川区のこのあたりは、隣近所（向こう三軒両隣）が肩を寄せ合うようにして生活している典型的な下町であるということが、合蓄の成功の素地になっているのではないかという点で、他の場所でも同様な試みが成功するかどうかは難しい。

（写真1-1, 2, 3, 4参照）

2) いきいきプラザ一番町（千代田区）

いきいきプラザ一番町は特別養護老人ホームを中心として、文化コミュニティ、健康保健の各サービス機能を合わせ備えた、総合公共施設として、平成7年に開設された。

まず千代田区は区政を総合的、計画的に推進する基盤として昭和53年6月に千代田区基本構想を策定し、「活気と安らぎのある調和のとれたまち」を実現することを区政の基本目標と定めていた。昭和59年には「教育と文化のまち千代田区宣言」を行い、さらに昭和62年に「千代田区街づくり方針」を定め、住民、企業、行政が一体となり区政の課題の解決に向け諸施策の展開を図っている。その最重要課題として高齢化比率が23区中極めて高く、14.9%（平成2年）となっている中で、高齢者施設の充実は全区的に強く望まれた。

各区において特養の建設が盛んになる中で、千代田区では、ノーマライゼーションの理念に

基づき特別養護老人ホームや在宅福祉サービスセンターの区内設置が望まれたのが第1点、次に、文化コミュニティ施設、健康・保健施設について特に一番町地区において強い要望となっていて、公共施設の現状からみてもその整備が急がれたのが第2点、このような観点から、旧国鉄総裁公館跡地を購入し、全区民の要望に沿う公共施設を建設するに至る。

地上8階の建物で、1階地下1階が文化コミュニティ施設、2, 3階が、高齢者在宅サービスセンター、ボランティアセンター、4~6階が特別養護老人ホーム、7階が、高齢者住宅、8階を健康・保健施設となっている（図2参照）。

施設の建設に当たっては、人間主体、人間尊重の視点を根底に据えた街づくりを推進する5つの考え方

- ① 千代田区に住み・働き・学ぶ様々な人々が利用し、人と人との温かいふれあいや安らぎを大切にした広く開かれた施設とする。
 - ② 21世紀に向けての国際化社会にふさわしい施設とする。
 - ③ 新しい生活文化および都市文化の創造につながるものとする。
 - ④ 高齢者や障害者等の利用に十分配慮し、「千代田区福祉環境整備要綱」の趣旨を生かした施設とするとともに、特に地震や災害など不慮の災害に対して安全性の高い施設とする。
 - ⑤ 管理運営のしやすい施設とするとともに、働く人の職場環境を考慮した施設とする。
- を基本理念としている。

又、管理運営の基本的考え方の特徴は、専門性を発揮し、質の高いサービスの提供、プライバシーの確保、地域住民と利用者のふれあい交流を盛んにする管理運営をすることである。

特に他の2件の施設と根本的に違うところがある。施設として、使われている言葉に着目すると生活施設、個別施設、総合公共施設というように、「福祉」という言葉を徹底して、意識的に排除して使っていない。その代わりに、サービス機能、専門性という言葉が目につく。

表1 高齢者福祉施設の概要 — 3事例 —

開設年・名称・所在地			
<p>昭和62年・老人デイサービスセンター江東園ふれあいの里 ・ 養護老人ホーム・江東園 ・ 特別養護老人ホーム・リバーサイドグリーン ・ 江戸川保育園</p> <p>所在地 江戸川区江戸川1-46</p>	<p>江戸川区 社会福祉法人 江東園</p>	<p>千代田区 いきいきプラザ一番町</p> <p>平成7年・一番町特別養護老人ホーム ・ 一番町高齢者在宅サービスセンター ・ いきいきプラザ一番町（ホール・プール） ・ いきいきプラザ一番町高齢者住宅</p> <p>所在地 千代田区一番町12</p>	<p>三鷹市 どんぐり山</p> <p>平成8年・三鷹市立特別養護老人ホーム ・ 三鷹市立高齢者センター ・ 同一敷地内に椎の実子供の家</p> <p>所在地 三鷹市大沢4-8-8</p>
立地条件	<p>「老幼合体」江戸川保育園と老人ホーム都宮地下鉄新宿線の瑞江駅から徒歩10分、宅地造成が進みこのあたりは3階建の住宅が軒を連ねて建築されている。まだところどころ畑が残っていて、新しいものとの古いものが雑居している。施設は特に下町の風情を残す住宅地の一面にある。</p> <p>RC造3階建て、打ち放しとポイント彩色の躯体に、切り妻のペデスティメントをあしらひ、壁面は楽しいレリーフ仕上げになっている。</p>	<p>旧国鉄総裁公館跡地である建設地は第一文教地区で、他総合病院や大病院、文化施設もたくさんある。又夜間人口が少ないが昼間人口がかなりあるという特定地域であるがゆえ、学校や企業の人たちを社会資源としてネットワークが考えられ始めている。</p> <p>SRC造り、地上8階、地下2階、庭園ロビーや、レストランを設けた（千代田区に住み、働き、学ぶ様々な人々が利用し広く開かれた施設として）都市景観を十分配慮した地域建築物の先導的外観である。</p>	<p>市内でも大沢の高台に建設され、隣接に「椎の実子供の家」がある。眼下に野川の流れを見下ろす小高い台地、樹々の緑に囲まれている。出土した石器や土器からも古代人の暮らしぶりの一端をうかがい知る。又昔は子どもたちの恰好の遊び場。風、水、木、虫、鳥といった生命を近くに感じることができ場所である。</p> <p>RC造、地上3階地下1階、外壁はタイル貼り入口に「どんぐり山」と樺の一枚板に書かれた看板がある。</p>

<p>事業の位置づけ</p>	<p>昭和37年に、高齢者社会の到来を先見し、社会福祉法人「江東園」開設、認可を得、昭和45年に江戸川区保育園を開設、昭和51年に認可を得、同一敷地内に養護老人ホームと江戸川保育園の二つの施設を運営 昭和62年、地域のニーズに対応すべく、特別養護老人ホーム及び江戸川高齢者在宅サービス事業を新たに運営 4施設を合蓄の形態で総合福祉施設として増設。</p>	<p>千代田区の高齢者比率は平成2年1月14.85%と23区中極めて高く、高齢者施設の充実が全区的に望まれていた。高齢者施設としては、特別養護老人ホームや在宅福祉サービスセンター等の区内設置が望まれ、それにふさわしい良好な環境を望む。 又、文化コミュニティ施設の健康・保健施設を強く要望され、公共施設の現状からみても、必要。地元並に全区民の要望に添うために、21世紀を目指す新しい施設形態として高齢者サービス機能を中心として、文化コミュニティ機能、健康・保健機能の3つの機能を兼ね備えた総合公共施設として建設。特養老人ホームの管理運営を経験豊かな社会福祉法人博仁会へ委託</p>	<p>昭和48年「稚の実子供の家」保育園の経営を楽山会が、平成8年4月、その地続きの楽山会が市からの事業委託で運営管理する。開設準備に民間人が取り組む。「福祉」、「収容」、「特別」「心のバリアフリー」等々を勉強していく中で、疑問視して、特別養護老人ホーム○○園とは別な名称を付けたいと考へ、名称の公募から始まる。「どんぐり山」の誕生、複合施設を以下のように定義づける。 特養を、高齢者市民専用の集合住宅に、ディサービスを日帰りの福祉施設に、ショートステイを連続して宿泊できる福祉施設に置き換える。 21世紀を見据えた新たな村おこし桃源郷創り</p>
<p>管理運営の基本的な考え方</p>	<p>「園がひとつの健全な社会でありたい」を設立以来の理念としてしている。 江東園は社会福祉法人として、老若男女が何れの状態でも、心の触れ合いと助け合いによる喜びを分かちあえるような社会を理想郷としてめざしている。 実際には、お年寄りにも、家族の方々にも、身近な地域社会で、その一員として、3世代、4世代が一家団らんに近い姿で暮らせる施設として歩むことをモットーにしている。 園では家庭的な雰囲気、家庭との接触を多くし、さらに、社会との交流を積極的に展開することによって、お年寄りが、生き甲斐を持てる生活ができるような体制をたてている。 又特別養護老人ホームにも、上記の「養護老人ホーム」の理念と通ずるが、施設内に社会を取りこみ、利用者の精神的・肉体的衰弱をストップさせ、さらには回復を目的にしている。</p>	<p>1. 個別施設の専門的特性が十分発揮できるものとする とともに、施設全体が一つの総合施設として一体性が確保される管理運営とすること。 2. 質の高いサービスの提供を図るとともに、経営効率の良い管理運営とすること。 3. 利用者の利便性・安全性が確保される管理運営とすること。 4. 既存施設や既存サービスとの連携を図った管理運営とすること。 5. 入所者・入居者の生活の場として良好な生活環境のもとにプライバシーの確保を図るとともに、地域住民や施設利用者とのふれあい交流を盛んにする管理運営とすること。 6. 本施設が、地域に密着した地域の一員であるという認識に基づいた管理運営とすること。 特に特養老人ホームについては入所者にとっては日常生活の場である。 したがって、良好な生活環境のもとに個人の意思が尊重され、プライバシーが保護されなければならない。それだけに本施設の管理運営に当たっては、入所者の寝たきり等個別ニーズに即して専門技術を駆使した質の高いサービスの高いサービスを提供する必要がある。 そして質の高いサービスを提供するためには、施設管理運営についての豊かな経験、福祉に対する熟意及び専門職を確保する能力が必要である。</p>	<p>「優しくあれ、温かくあれ、そして共にあれ、人間らしく」法人楽山会の理念を心得としてしている。 1. 主権者の考え方 特別養護老人ホームを「家」に置き換え、「家」に転居して来られた市民は「家主」宿泊される市民、日帰りされる市民「お客様」 2. 福祉と誇 楽山会の職員は家主やお客様の「しあわせ」を探究し、「いのちながし」を実践する。 3. 施設からの脱皮 特別養護老人ホームという「施設」の認識よりも集合住宅の中の個々の「家」として意識 4. 言葉使い 家主と職員は民間人同志、役所言葉を慎み、同じ目線で語り合うことを心がける。 5. 地域福祉 ①地域福祉の環境づくり どんぐり山の開放化、社会化を進め、地域の人々と「共に歩む」福祉 ②福祉文化の環境づくり ①の延長線上に ③遠心力と求心力 地域の人々への働きかけのあり方を考へる。</p>

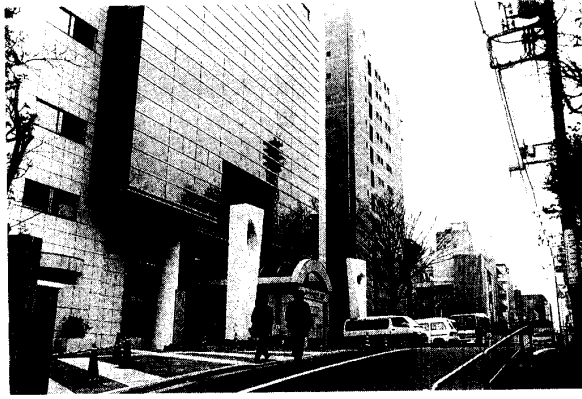


写真 2-1

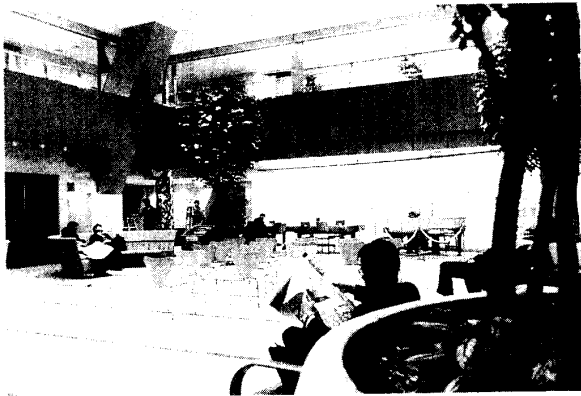


写真 2-2

子どもから高齢者まで、幅広い世代の人々が、ボランティア活動をはじめ文化活動やコミュニティ活動を通じ、共に集い、憩い、そして交流することを強調し、それらの機能を合わせもつ都市型の総合公共施設といっている。現代の都市における総合化というと単に各個の機能をよせ集めてひとつの器にする場合が一般的である。この施設もそれに近い。

建物の形態を通して用途別利用する人々の交流がはかられ、なされているかというところうまくいっていないようである。

返って、色々な問題点が浮上してきている。この建物に高齢者施設が入っていることすら知らない人も多い。基本的理念に人間主体・人間尊重と唱えていることが個人主義・個人尊重ときこえてしかたがない。個人の育成の為であり、個人の健康の為であり、個人の為の施設として存在している。個が他（個と個が）に自然に働きかける関係としての力が起こるような空間はどこにもしかけられていない。すべて専門性によるサービス提供を重視してはいるが経験的・慣習的な方法で各用途空間をつないだにすぎな

い。形骸化した計画・設計で、そこでは共生も形骸化したものでしかなさそうだ。

ところで、いきいきプラザ一番町が立地しているあたりは住むにはとてもコストが高く厳しい状況である所であるが、伝統ある文化を誇り、維持していこうとする住民意識が強い。特に一番町は文教地区であり、高地価であり、良好な住環境であるということは、この施設の資産価値に影響していると考えている側面が強い。

総合公共施設という認識は福祉という言葉をあえて避けて公共性を全面に出した施設ということである。全体的に雇われ感覚の雰囲気漂うのもサービス提供の為の施設として位置づけられている域を固執しているからであろうか。

(写真 2-1, 2 参照)

3) どんぐり山 (三鷹市)

どんぐり山は三鷹市から社会福祉法人楽山会に管理運営を委託された公設民営の高齢者福祉施設である。楽山会は地続きで「椎の実子どもの家」保育園をS46年から経営している。

どんぐり山は市に願い出て公募して選んだ名

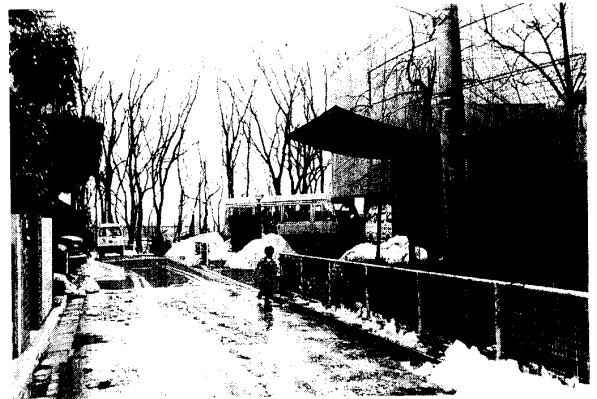


写真 3-1



写真 3-2

称である。何故ば、「特別養護老人ホーム」と言う呼び方を使いたくないという準備から関係した担当者のこだわりである。このように、準備していく中で、勉強していく時、多くのことで「壁」に突き当たったともいう。例えば、「福祉って」何、「収容って何に」、「特別養護老人ホームって」何、「何ぞ特養なの」、福祉施設の保養所に宿泊するとき、「ショートステイ」となぜなのか、「ノーマライゼーション」の理念を声高に叫びながら、他方において特養という箱物への「特別視」、日帰りでどんぐり山を利用する場合「ディサービス」と言う。しかし「ディサービスセンター」の中身はカルチャーセンターとさほど変わらない。なのにカルチャーセンターを「ディサービスセンター」とは言わないであろう。というように、福祉って何、「特別視」することなのを発端に疑問が沸き、すべてにおいて概念と現実のあり様を整理して、バリアフリーを完成度の高いものにしようと試み、したがって建物もそのように追求されたものになっている。

地上3階地下1階の建物である(図3参照)。建築上の高低差は見事なまでに無い。特に一般的に寮母室は、窓にガラス戸、出入口には扉がつき、一つの執務室の形態をとっている。このガラス戸や扉が閉まってしまうと、入居者の声も聞こえない。会話がな、悲鳴もきこえない。これでは、入居者と職員との間に、わざわざ障害物を作り、距離間も演出してしまう。福祉関係者は建物の高低のみではなくして、人と人との間にもバリアーを作ってはならないという考えから、ガラス戸も扉も取り払い、カウンターを挟んでの会話、誰でも入れる寮母室となり、「どんぐり山」のバリアフリーは完成度の高いものと自負している。

どんぐり山の管理運営に係わる基本的な考え方は

- ① 特別養護老人ホームを高齢者市民の専用独身寮ないしは集合住宅としての施設運用
- ② 高齢者センターを高齢者専用の保養所として位置づける

この①と②の異なった福祉施設は、旧来、特別養護老人ホームと在宅サービスセンターという共に高齢者福祉の名目で同じような施設として位置づけられ運用されてきた。この考え方を踏襲しては新たに「特別視する」施設を増やすことに他ならない。

そこで、この種の施設に対する意識改革を叫ばなければならないと考えて、楽山会が管理運営を受託した民間法人の責務に応えなければならない。この強い決意が特別養護老人ホームは「高齢者専用の独身寮ないしは集合住宅」として、在宅サービスセンターは「高齢者専用の保養所」として、異なる二つの複合施設を念頭に入れて、三鷹市高齢者市民の「福祉としあわせ」を目指すことになる。

「どんぐり山」は特別養護老人ホームという名の施設の「いらか」を越えたいという考えから、時代の要請である介護について、その自覚をどの程度持つかが求められているという認識をもって、21世紀の高齢者福祉のなかの「介護」という新しい分野の確立へ引き継いでいく重要な担い手ではないだろうか。だからこそ「どんぐり山」は、医療的な治療ではなく、人の手を使っての係り・介護を必要とする人との住処である。

そして、利用者「家族」の生活のお手伝いが「どんぐり山」の姿であり、「どんぐり山」理念、「優しくあれ、温かくあれ、そして共にあれ人間らしく」に結びつくのである。

「どんぐり山」の名付け親である81歳のOさんによれば、昔、緑濃い森は子どもたちの恰好の遊び場になっていたという。そして今、窓の外に目をやれば、風に揺れる艶やかな緑が飛び込んでくる。秋の夜長には、次から次へと落ちてくるどんぐりの実の音を耳にすることができる。

樹々の生命、人の生命を愛おしみながら時空間を刻んでいる環境がここにある。

(写真 3-1, 2 参照)

表2 高齢者福祉施設の地域特性 — 3事例 —

所	江戸川区	千代田区	三鷹市
名称	特殊法人 江東園	いきいきプラザ一番町	どんぐり山
認識	福祉施設	総合公共施設	家
利用者	特養老人 養護 区民老人 幼児	特養老人 区民老人 区民 一般(学生, 働く人)	特養老人 市民老人 (幼児)
目的	自立 相互扶助	文化(医療, 健康) サービス提供	介護 (自覚の養成)
	行動(役割)	知(知識, 技術)	情(温かくあれ)
中心	社会性 社会主義的 人間観	専門性 個人主義的 文化観	人間性 家主義的 生命観
環境	雑居型(アジア的)	都市型(ヨーロッパ的)	自然型(日本的)

(4) まとめ

以上の3施設の地域における特性を表2にまとめると、江東園(江戸川区)は「福祉施設」として、いきいきプラザ一番町(千代田区)は「公共施設」として、どんぐり山(三鷹市)は「家」として位置づけていることが明らかになった。又各施設は順番に、社会性、専門性、人間性に照準をさだめ、職員および利用者とのかかわり方へ反映している。

そこで、各施設の特性についてみると、江東園は老若男女の相互扶助を大事にしながら社会とのつながりに勢力的であり、福祉的な発想を第一義にして自立をめざすための援助行為を奨励する「雑居型社会主義的施設」である。

いきいきプラザ一番町は、科学技術と文化の恩恵を市民・一般人が享受して、新しい文化を創造しようとする知的存在としての施設として個人へ還元する「都市型個人主義的施設」である。

どんぐり山は自然に人間の幸せの根源を探り、命を大切にすることを介護を通してみつめようとしている施設である。自ずと家庭の温もりが

介護には大事であるといった情的価値を第一義にした「自然型家主義的施設」である。

IV おわりに

福祉行政に関する制度的な整備と、それにのっとなった高齢者の住環境とりわけ高齢者福祉施設の整備が急速力で進められてきている。既存の老人施設が都市周辺部に追いやられていた反省というより、4人に1人が高齢者である超高齢者社会を予測するならば、そうした要介護老人を、心身障害者を扱うような特定の見方で「社会性」をなく奪するような暮らし方は決して望ましいものではない。

今回とり上げた三つの施設は都市の用地取得が困難なことを理由に公共施設や福祉施設の合蓄が行われ、異なる施設を利用する老若男女が生活空間を共用する空間形態をとって、その地域の特性、いわゆる地域社会に対するビジョンが明確に形にあらわれていたものとして評価することができる。

単に施設内だけの平面計画や配置計画にとどまるような福祉施設として捉えるのではなく、

構造的に地域社会の中に組み込まれてゆく具体的な方策が急務であるといわれる由縁ではないだろうか。

特に、江東園のように、向こう三軒両隣が肩を寄せあうようにして生活している典型的な下町である場所に立てられた合蓄形態の施設は、非常に土地柄に負っているのではないかと思わせられる。が、決して江東園だけが土地柄に負っているのではない。

何れの施設も、環境に対する、人間に対する、生命に対する、どのレベルでの関係を創っていかようとしているかが構想の中に取りこまれて、その施設のソフトが創りあげられて実践しているといえないだろうか。

将来的にはさまざまな特色を持った高齢者福祉施設が建ち、そのうちから入居希望者が自分の生き方にあった施設を選択して、入居できるという形態になるのが理想である。

記 本稿は、平成8年度、岡野研究奨励補助金（共同研究）の交付を受けて行った共同研究の成果の一部を論文としてまとめたものである。

引用文献

- 1) 『高齢化社会に対応した建築・地域環境の整備』
日本建築学会 1994年10月 p.82

参考文献

- 1) 『これからの社会福祉』 一番ヶ瀬康子編著 ミネルヴァ書房 1983年7月
- 2) 『新 社会福祉とは何か』 一番ヶ瀬康子編著 ミネルヴァ書房 1990年5月
- 3) 『高齢社会と地方分権』 斎藤弥生・山井和則 ミネルヴァ書房 1995年1月
- 4) 『老人ホーム』 建築思潮研究所・編建築資料研究社 1991年9月
- 5) 『居住福祉の論理』 早川和男・岡本祥浩 東京大学出版会 1995年6月
- 6) 『講座現代居住』 大本圭野・戒能通厚 東京大学出版会 1996年6月

- 7) 『バリアフリーの時代』 古瀬敏 都市文化社 1997年4月
- 8) 『高齢社会に対応した建築・地域環境の整備』 日本建築学会 1994年10月
- 9) 『造景』 建築資料研究社 1996年12月 No.6
- 10) 『公共建築』 公共建築協会 1997年7月 Vol.39
- 11) 『高齢社会白書』 9年版』 総務庁編 大蔵省印刷局 1997年

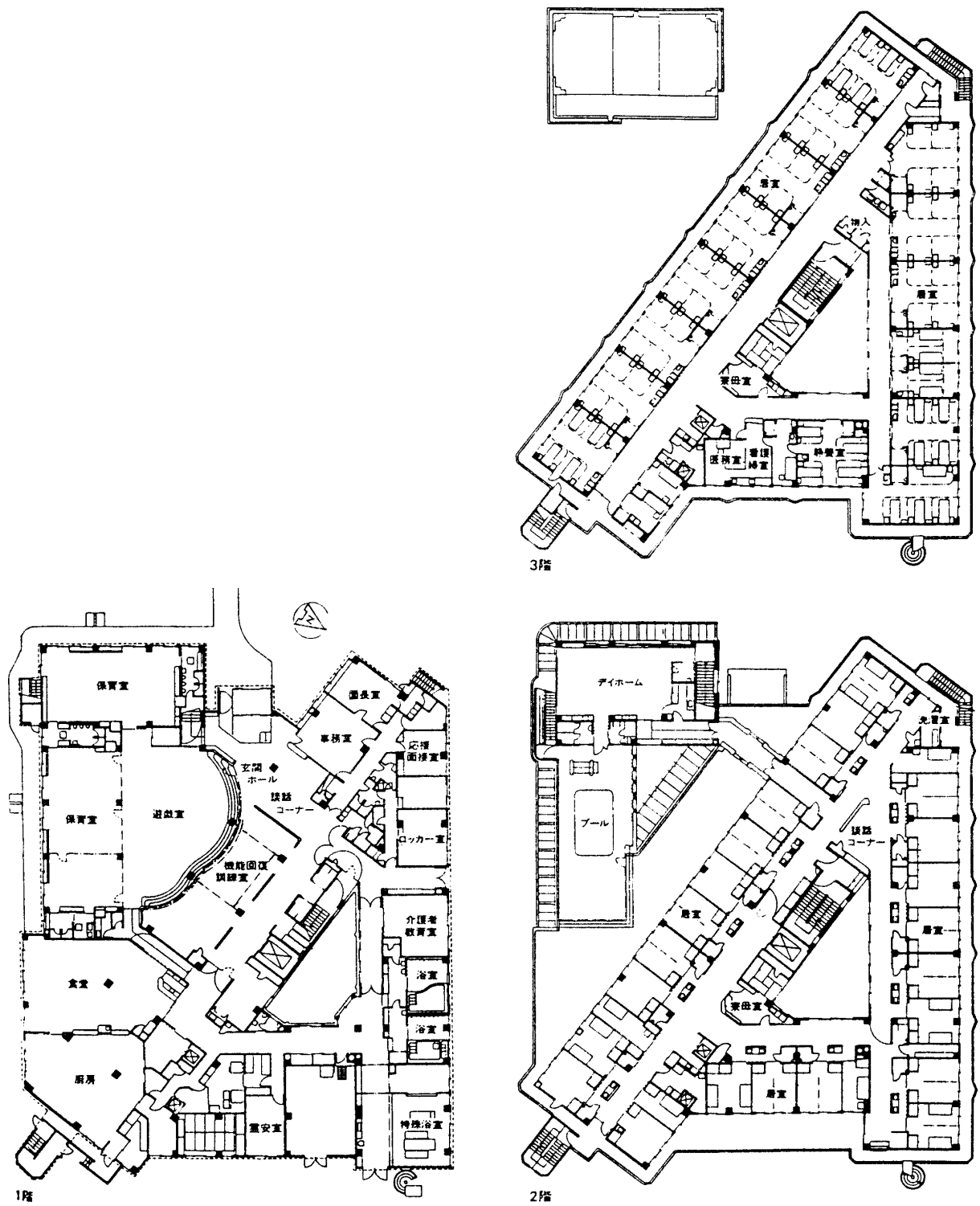


図1 江東園 (各階平面図)

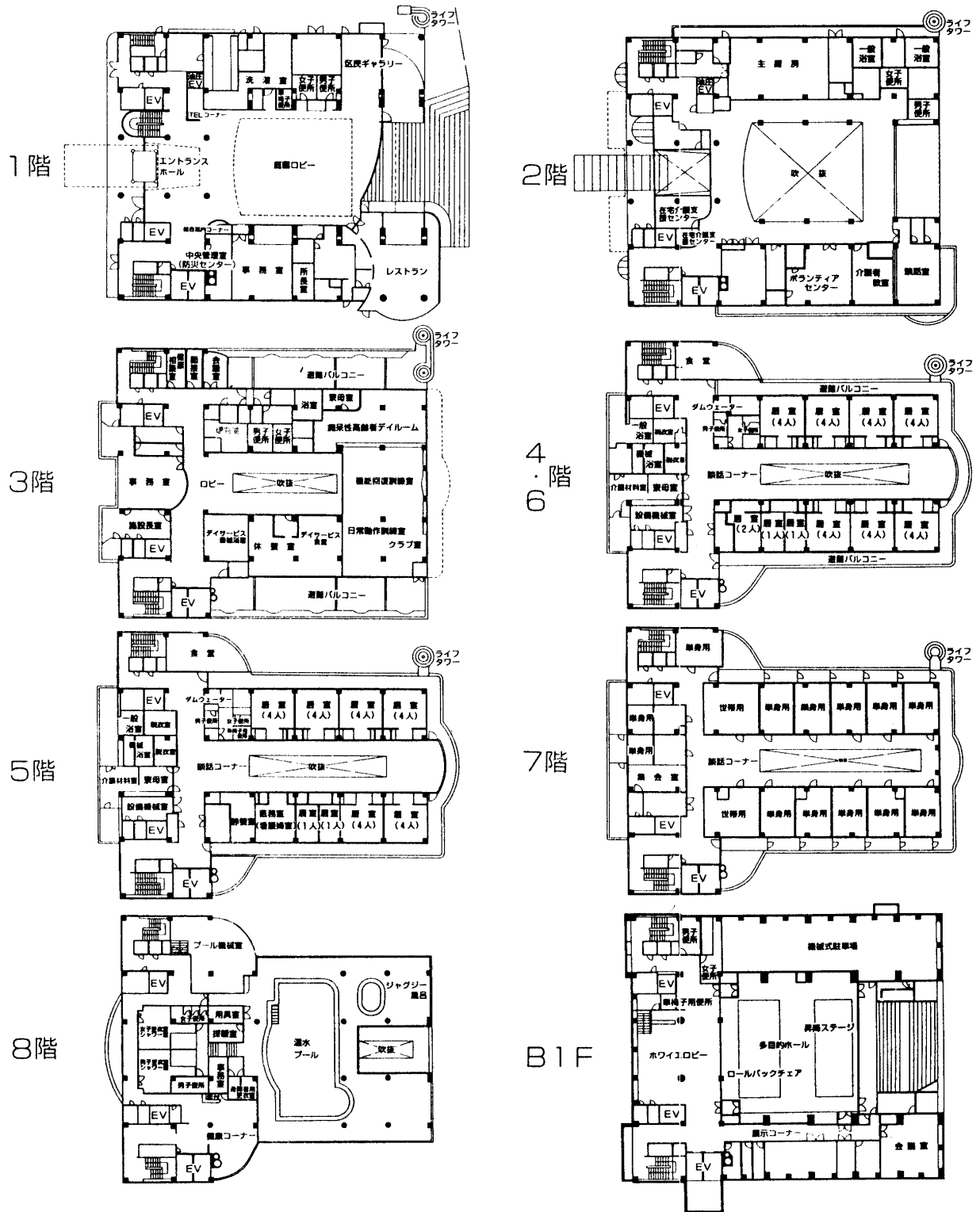


図2 いきいきプラザ一番町（各階平面図）

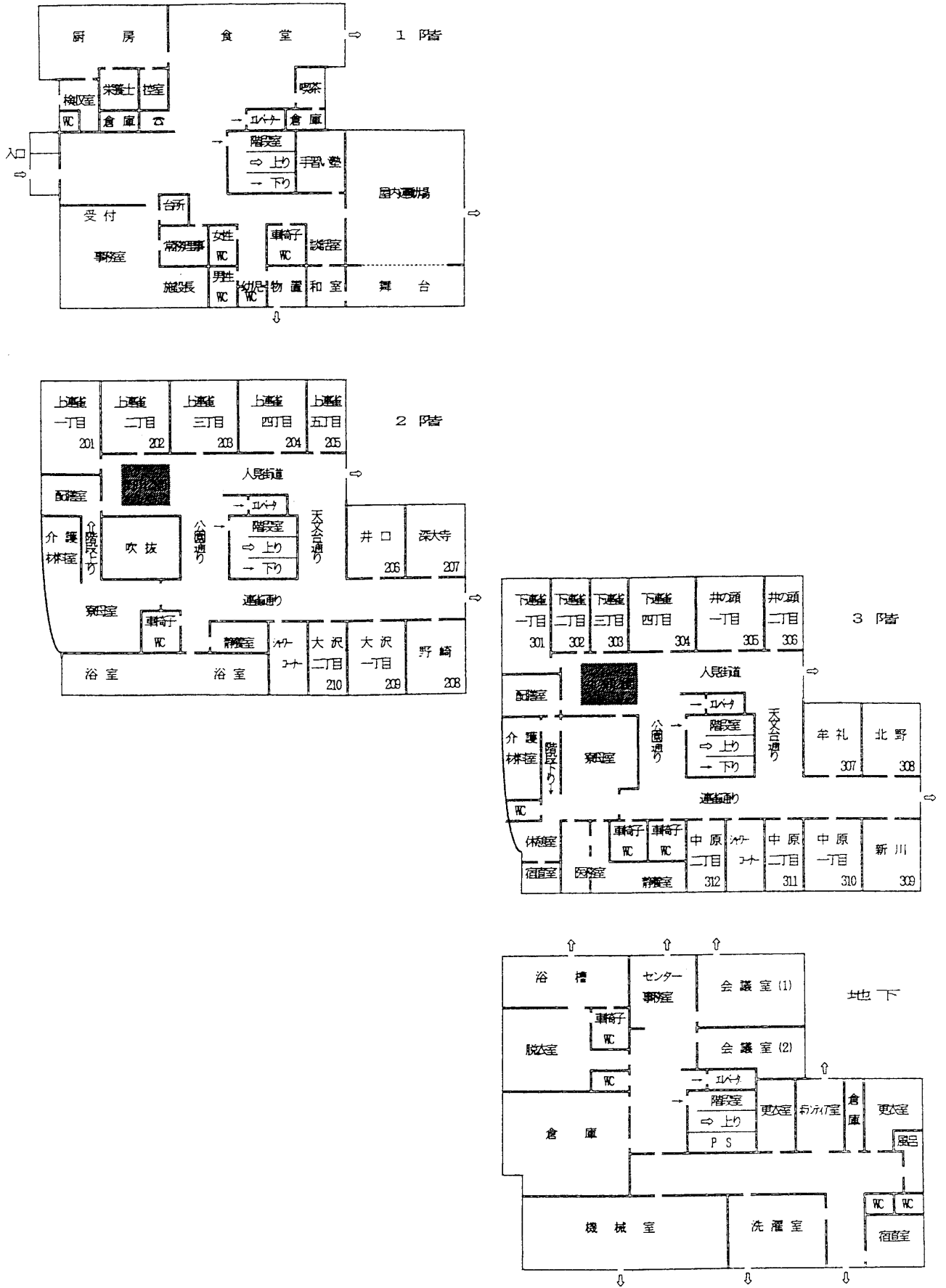


図3 どんぐり山 (各階平面図)